

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	花 暁波
論文題目	Land Use Change and Livelihood Transition in the China-ASEAN Borderland 中国－ASEAN跨境域における土地利用変化と地域住民の生業転換に関する研究		
(論文内容の要旨)			
<p>中国と東南アジアとの国境は、2000年代になって急速に、道路網等のインフラが整備されるとともに、人やモノの往来に関する制度整備が進んだ。本論文は、これまでの「閉ざされた国境」から「開かれた国境」への変化が跨境地域の地域住民の生業や生活、土地利用システムに与えた影響を、中国とミャンマーの国境地帯を対象として、総合的に考察するとともに、「開かれた国境」が生みつつある課題を指摘することを試みたものである。</p> <p>第1章においては、跨境地域に関する先行研究を踏まえて近年の中国と東南アジアの跨境地域の変容を概観し、本研究の目的と構成を提示している。また第2章においては、跨境地域は歴史的、文化的背景が異なる多民族により構成されていること、隣国との労働力の移動があること、合法的な交易に加えて非合法的な物流も存在すること等により、その生業・土地利用システムはより複合的な要因の影響を受けることを指摘し、それらを地域社会内部の文化－経済－生態の相互作用、一国内の跨境地域とそれ以外の地域の相互作用、国境を跨ぐ地域社会間の相互作用、2国間のより包括的な相互作用に整理したうえで、跨境地域の生業・土地利用システムモデルを本論文の基本的視座として提示している。さらに第3章においては、本論文が対象とする中国とミャンマーの跨境地域の概要を示したうえで、調査の方法と調査項目を紹介している。</p> <p>第4章においては、地域社会内部の文化－経済－生態の相互作用に着目して、「開かれた国境」が土地利用や農業に与えた影響を異なる民族によって構成される2農村を対象とした村落調査に基づいて比較、検討し、新技術や農産物市場へのアクセスが容易な漢族住民が多様な商品作物栽培に積極的に取り組んでいるのに対して、従前、大きな経営規模を有していた少数民族が徐々に耕作放棄しつつあること、この動きを促進した一つの要因は、農地貸借制度の整備を契機として農地の使用权が少数民族から漢族住民に移動したことであることを示し、これが民族間の経済格差を助長していることを指摘した。</p> <p>第5章においては、国境を跨ぐ地域社会間の相互作用や2国間のより包括的な相互作用に着目して、漢族住民による多様な商品作物栽培を支える労働力を分析し、地域住民が農外就業機会を求めて村外へ移出するなかで労働集約的な商品作物栽培を導入することができたのはミャンマー人農業労働者の受け入れを促進したからであることを示している。同時に、これらミャンマー人農業労働者の調達、従前から存在した国</p>			

境を跨ぐ地域社会間のネットワークのみに依拠したものではなく、両国間で新たに整備された労働者受け入れ制度を活用したものであることを示唆した。

第6章においては、一国内の跨境地域とそれ以外の地域の相互作用や2国間のより包括的な相互作用に着目して、中国国内市場向けの熱帯農産物生産が跨境地域の生業・土地利用システムに与えた影響を分析している。中国国内における果物市場の急激な拡大を反映して、中国と東南アジアとの国境地帯では雲南省外からの果物業者によるバナナやスイカ等の栽培が増加している。これに対して、一部の農民は長期契約により農地を果物業者に貸し出し、自らは農外就業を得て離農しつつあるが、残りの農民はより労働集約的な商品作物栽培に自ら取り組み始めており、跨境地域の農民の営農のあり方が二極化する傾向にあることを明らかにした。

第7章においては、国境を跨ぐ地域社会間の相互作用に着目して、跨境地域で非合法的に流通している麻薬が地域住民の生活や生業に与える影響を分析している。とりわけ少数民族によって構成される農村では無視できない数の麻薬患者が存在し、政府は治療プログラムを提供している。現在治療中の住民世帯や治療が終わった住民世帯を対象とした調査に基づいて、麻薬患者は治療後も、在村のままでは麻薬に接する機会が多く再発のリスクが高いこと、そのため、とりわけ若い世代では治療後、夫婦で村外へ出稼ぎに行くことが多いこと、これがその世帯の労働力不足を招き、農業活動を縮小する結果を招いていることを明らかにした。

第8章においては、国境を跨ぐ地域社会間の相互作用や2国間のより包括的な相互作用に着目して、ミャンマーにおける中国市場向けの果物栽培を分析し、それが多様な中国人およびミャンマー人の果物栽培業者や輸送業者に支えられていること、両国間での合意に基づいた輸送手段や市場等のインフラが急速に整備されていることを示している。

第9章においては、跨境地域における生業・土地利用システムが複合的な要因のもとで変容しつつあることを総括するとともに、その動きに内包される民族間格差や労働力移動、社会に悪影響を与えるモノの移動等を踏まえて、多民族によって構成されていることを前提とした土地管理制度や跨境地域の現状を反映した国境ガバナンスの確立の必要性を主張している。

(論文審査の結果の要旨)

世界最大の人口を擁し、世界2位の経済大国となった中国と東南アジアとの交流が活性化している。それは、国レベルの政治的な関係強化のみならず、地方におけるインフラ整備や人、モノ、投資の動きにも表れている。本論文は、中国とミャンマーの跨境地域において、両国間の交流の活性化が地域住民の生業や生活に与える影響を、主として中国側農村を対象として総合的に分析し、中国とミャンマーの交流の活性化の功罪を明らかにするとともに、跨境地域の健全な発展に向けた課題を論じることに成功している。学問的貢献として以下の3点を挙げるができる。

第1は東南アジア地域研究への貢献である。東南アジアの農業・農村研究において、中国からの投資の増加や中国市場向けの商品作物栽培の普及は重要な論点となりつつある。これらは農業発展の原動力であるとともに、地域住民からの土地収奪や農薬等に起因する環境汚染を生んでいるからである。これまでの東南アジア地域研究ではその実態を把握することはできたが、その背景となっている中国側の社会経済状況が不明なため、有効な対応策を提示できなかった。本論文は、東南アジアで起こっていることは中国側で起こっていることの外延的拡大と考えることができること、すなわち跨境地域の中国側においても東南アジア側と同じダイナミズムのもとで農業・農村が変容しつつあることを明らかにした。

第2は跨境地域研究への貢献である。国境が「閉ざされた国境」から「開かれた国境」に変化することにより、跨境地域に限定された従前からの相互交流に加えて、国レベルの交流が活性化される。この変化が跨境地域に与える影響は、国境を跨ぐ物流の増加や労働市場の形成に限定されるものではない。本論文は、企業家の進出による商品作物栽培の普及が地域住民による商品作物栽培を促進したり、国境を越えた麻薬の流通による中毒患者が治癒後、麻薬との接触を断つために他地域へ流出したりすること等を明らかにして、地域住民の生業や生活がより包括的な影響を受けることを提示し、総合的な視点からの跨境地域研究の必要性を指摘した。

第3は生業・土地利用システム研究への貢献である。アジア小農社会における生業・土地利用システム研究は、土地へのアクセスや利用可能な労働力を所与の条件としてきた。しかし本論文が対象とした跨境地域では、農地貸借市場の形成や移民労働力の受け入れを契機としてこの前提が短期間で成り立たなくなり、それが従前の自給的な農業を基盤とした生業・土地利用システムから商品作物栽培を基盤とした多様な生業・土地利用システムへの急激な転換を促進したことを明らかにした。生業・土地利用システム研究において土地や労働力に関する条件が決定的な意義を持つことを改めて示すものである。

このように、本論文は中国と東南アジアの交流の活性化が跨境地域に与える影響を総

合的地域研究の視座から検討することの有効性・有用性を示すものであり、その学問的・実践的意義は大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。